



海辺のカフカ 精神分析的解釈

酒井 健

『海辺のカフカ』に対する精神分析的解釈を行うにあたって

村上春樹（二〇〇二）発表の『海辺のカフカ』は、十五歳の少年田村カフカが抱く両親との関係性の空想についての話（木部）¹ だと言えるでしょう。特に、姿形のおぼろげな記憶も危うい母親との関係についての空想が主題となっています。その内容は、父親からの次のような呪い² 「お前はいつかその手で父親を殺し、いつか母親と交わることになるって（上巻 p.426）」が関連しています。この呪いについて大島さんは「それはオイディプス王が受けた予言とまったく同じだ。そのことはもちろん君にはわかってるんだらうね？」と述べています。細部に違いはあるものの、確かにおおよその内容はエディプス神話における神託と同じであると言えるでしょう。では、本ストーリーの核ともいえる少年カフカの母親（及び姉）を巡る空想に関して、この呪いが示されるのは何故なのでしょうか。この点について、『海辺のカフカ』を田村カフカの成長物語であるとするならば、その意味を読み解くために、精神分析というエディ

プス・コンプレックスの概念を中心に考察を加えることで、本作品に対する何らかの理解が得られると思います。なお本内容に関しては、木部則雄の『こどもの精神分析』ほか幾人かの論者の考察から多くの示唆を得ています。

エディプス・コンプレックスとは

無意識の心理学を打ち立てたとされるS・フロイトの精神分析理論の中核に、エディプス・コンプレックスという概念があります。これはフロイト自身が体験した父親喪失にまつわる自己分析の結果から、自分の中に、〃父親を亡き者とし、母親を独占したい願望〃があり、その願望は意識にとっては認めがたい内容であったために、〃無意識領域に押し込められた〃と考えたのでした。さらにそれは一個人にたまたま生じた空想ではなく、人類に普遍的に共通な空想（原幻想）であると論じています。この〃父親を亡き者とし母と結ばれたい〃空想をソフォクレスのギリシャ悲劇であるエディプス王になぞらえ、この心のあり方をエディプス・コンプレックスと名付けたのです。

この空想は、「装置」によって僕の中に埋め込まれている」（上 p.23）

精神分析入門で、フロイトは「人間はたとえ悪しき衝動を無意識の中に抑圧し」「その衝動に対して何

の責任もないと言いたくても」「その責任を自分には訳のわからない罪悪感」という形で感じざるを得ないのだと述べています。つまり罪悪感の起源と超自我の形成とエディプス・コンプレックスは結びつけて考えないとなりません。

カフカ少年は十五歳ですが、年齢以上に精神的に大人びている、いえ、冷めているのか抑制や抑圧が強いためなのか、そのあたりも判然としないまま、子どもらしさと大人らしさが入り交じっているという雰囲気を持つているように思えます。思春期のただ中にいる状態でもあり、また異なるようにも思えます。思春期とはおわかりのように、性的欲求にまつわる様々な衝動が生まれ始め、同時に私とは何かということについて考え始める時期でもあります。こういった性的な欲求と衝動に対するタブーの起源は、エディプス・コンプレックスにあると考えられています。その意味でもカフカの有り様はエディプスと関連づけて考察する意味があると思われるます。

人は五〜六歳頃になると男女の違いに気づき、男の子の場合は母親に関心を向け始めることから、エディプス・コンプレックスは始まります。この母親への愛は同時に父親の怒りを喚起すると空想され、それ故に子どもは恐怖感を強く感じるようになります。これを去勢不安と呼びます。そのため、男の子は父親の怒りをしずめ、また母親の愛を得る方策として、母親の愛する父親のようになろうと努めることになるのだと考えられています。このプロセスによって、父親の属性を取り込んでいくのであり、性役割の獲得

が行われるわけです。この同一化と抑圧能力の獲得によって、七才頃までには一旦葛藤を処理することができるようになることで、幼児的な性欲動を強く抑圧することが可能になるのです。ですから児童期は思春期の頃とは比べられないくらい性的には穏やかな状態を維持できるわけです。思春期までのしばらくの間、知識の獲得という非性欲動的な心的活動にエネルギーを使えるようになるというわけです。しかしこうして一度は影をひそめた性欲動は、思春期には成長の上で重要なテーマとして再度立ち現れてくることになります。

登場人物との関連

さて、このような心理学的概念を元に、海辺のカフカの登場人物および物語の構造を整理してみましょう。この作業によって登場人物の意味合いを明瞭にすることが目的です。

カフカ自身がエディプスだとすると、父親の田村浩一はライオス、佐伯さんはイオカステという事になるでしょう。しかし小説では、田村浩一を殺したのは、カフカ少年ではなくナカタさんです。この点に関しては、エディプスの担った役割のうち、意識的部分は田村カフカとして、無意識的部分はナカタさんとして、描かれていると考えることができますでしょう。と言いますのも、小説の構造は、カフカ少年の話とナカタさんの話とが交互にそして一見関連がないように進みながら、結局田村浩一（父）殺しが進行して

いるからです。カフカ少年は知らないうちに血まみれになっており（上 p.142）、おおよそ同じときにナカタさんはジョニー・ウォーカーを殺し、そして現実には田村浩一氏が殺されているのです。そうして、「君のラインと、その謎の老人のラインか、このあたりのどこかでクロスしようとしている（下 p.228）」の二つの関連性が述べられています。ナカタさんが殺したジョニー・ウォーカーはナカタさんにとってのライオス（父）、そして性的に関係を持ったわけではありませんが、四国で出会った佐伯さんがイオカステとなるでしょう。ただこのあてはめはやや形式的かもしれませんが。

カラスとカフカ

次にカフカ少年になぜカフカという名前が与えられている（自分で名付けたのかもしれませんが）のかを検討しておきたいと思います。

カフカと言われてまず連想するのは、作家フランツ・カフカでしょう。「フランツ」がドイツ人の名であるのに対して「カフカ (Kafka)」はチェコの姓であるとのこと。Kafka はチェコ語でコクマルカラス（コガラス）を意味する *Kavka* に由来しているという指摘があります。そういった言葉遊びで考えるなら、カフカの話し相手であり助言者であるカラスというは、カフカの言い換えであるともいえるでしょう。作家のカフカ自身は病弱な文学青年であり、その父親は、フランツ・カフカとは対極的で、非常に現実的な

やり手であったようです。カフカ自身は父を超えられない苦悩をずっと抱えていたようです。その意味でフランツ・カフカはエディプスを超えられなかったのだといえるでしょう。このあたりからは、『海辺のカフカ』のテーマとして、父を乗り越えるテーマも読み取れるかもしれませんが。基本的には『海辺のカフカ』の主題を心理学的に見るとしたら、それはエディプス・コンプレックスであるところから出発しているわけですが、さらにそれに加えて恋愛関係と同時に母子関係の混乱という主題も出てきています。このような混乱、すなわち母親と恋人とをごっちゃにしてしまうという精神状態は、精神分析的にとらえるならば、エディプス状況以前の精神状態、つまり非常に未熟なといいますか、幼児的空想段階のものであるということになります。そう考えると、カフカ少年の精神病理は、早期の、つまり乳幼児期の母子関係に生じた問題であり、それ故にかなり重症である可能性が示唆されます。

田村カフカ、佐伯さんそれぞれの精神病理と、母子関係

カフカ少年は、四才のときに母親に捨てられており、無意識的な暴力傾向があることが示唆され（解離傾向 *Disintegration*）、友人とも交わりを持たない孤立した、感情の欠落を抱えた少年として描写されています。内面の助言者であるカラスに従ってかたくなに人と距離をおいています。それは母親に捨てられたという外傷体験を持つカフカ少年が自らの心を守るための手段なのでしょう。精神分析学者の本部はこの点に

ついて、エスター・ビックの説を取り上げ、「早期の母子関係、特に十分にだっこされる体験に基づく適切な皮膚の形成が行われない場合、筋肉が皮膚の代わりに機能してしまう」と述べています。これは簡単に言うと、カフカ少年は、ほどよい皮膚すなわち外的刺激をほどよく取り入れたり遮断したりする本来の皮膚機能ではなく、堅く外界を遮断する筋肉由来の皮膚を身にまとっているということであり、本来情緒的接触を行うための（要するにふれあうための）皮膚機能は失われているということになります。そのためカフカの知性は、ひたすらスポンジのように知識を吸収していくことであり（上 p.20）、これは情緒を伴わないため、一種の模倣行為に過ぎないものとなります。いくら知識を入れてもそれは生き生きとした生命を持たないものとなります。この病的といつてよさそうな情緒欠落状態は、自分が愛される価値のない（よって母親に捨てられた）人間であるという考えに基づいているわけです。（下 p.373）。

小説中カフカの母親と目される佐伯さんの精神構造はどのようにとらえることができるでしょうか。一言で言えば佐伯さんの病理は、喪の作業（mourning work）の失敗に由来しているといえるでしょう。子どもの頃からまるで自分の一部であったかのような甲村氏を不意に失い、そのあと、甲村氏の死を受け入れることができていないのです。甲村氏の死はなかったことにされ（否認）、佐伯さんの中では甲村氏は文字通りまだ生きている状態なのでしょう。喪の作業が適切に行われた場合、失った対象に変わる新し

い対象を希求することができるようになると考えられていますが、佐伯さんは対象を失ったこと自体を否認しているので、対象がまだ生きているかのように感じているわけです。そういった意味では現実の認識が歪んでいるともいえるでしょう。そういう状態の中で、佐伯さんは田村氏と出会ってどうやらしばらく一緒に暮らしてはいるのですが、佐伯さんは他の誰でもない田村氏と出会ったのではなく、あたかも死なないうで生きている甲村氏をそこに見てしまったのではないのでしょうか。これは失った甲村氏と同じような田村氏に惹かれたという意味ではなく、田村氏を甲村氏と誤認しているという状態です。だとしたら田村氏から見たらそれは一種の絶望であり自分を自分として見てくれない佐伯さんにたいして強い怒りがあつたのではないかと想像されます。その怒りがカフカに呪いをかける元となつたのではないのでしょうか。ではなぜ怒りが子どもであるカフカに向いたのかということですが、これは次のように考えてみるとどうでしょうか。佐伯さんのところの中ではカフカは佐伯さんと甲村氏との子どもであり、同時にカフカは甲村氏であつたと思われます。これは小説の後半で、十五才の意識状態になっている佐伯さんがカフカを誘惑し、かつて甲村氏と持っていた性的関係をカフカとの間に持つてしまうところからも推測されます。そう見ると、田村氏の怒りは、つまるところカフカへの羨望、もしくは嫉妬なのだといえるでしょう。さて、話をもどしますが、佐伯さんの感情の中には、もう一つ、甲村氏への怒りもあつたものと思われます。

「いいかい、君の母親の中にもやはり激しい恐怖と怒りがあつたんだ。今の君と同じようにね。だから

こそ彼女はそのとき、君を捨てないわけにはいかなかった」(下 p.377)

これは田村氏が自分を置き去りにし、その上先に死んでしまったことへの怒りでしょう。その怒りは本来愛情の対象であるはずのカフカに対しても発動するでしょうから、佐伯さんはカフカへの怒り、もしかしたら殺したいと思うような憎しみも抱えてしまうことになったでしょう。それゆえカフカを捨てた：カフカから離れたというほうが適切かもしれませんが・・・理由ではないでしょうか。少なくともカフカを殺してしまうことは避けられたように思われます。

田村浩一

カフカの父親である田村氏は、学生時代に雷に打たれた経験を持っており、(下 p.50)。浩一氏が彫刻家として活動をするための、芸術家としての感性はその体験によって得られたと思われれます。田村氏の代表作は迷宮シリーズであるとされており、迷宮については、下巻 p.271 で次のように書かれています。

「この僕らの住んでいる世界には、いつもとなり合わせに別の世界がある。君はある程度までそこに足を踏み入れることができる。そこから無事に戻ってくることもできる。注意さえすればね。でもある地点をこえてしまうと、そこから二度と出てこられなくなる。帰り道がわからなくなってしまう。迷宮だ。迷

宮というのはそもそもどこから発想されたものか知っているかい？」

僕は首を振る。

「迷宮という概念を最初につくりだしたのは、今わかっているかぎりでは、古代メソポタミアの人々だ。彼らは動物の腸をあるいはおそらく時には人間の腸を引きずりだして、そのかたちで運命を占った。そしてその複雑なかたちを賞賛した。だから迷宮のかたちの基本は腸なんだ。つまり迷宮というものの原理は君自身の内側にある。そしてそれは君の外側にある迷宮性と呼応している」

「メタファー」と僕は言う。

「そうだ。相互メタファー。君の外にあるものは、君の内にあるものの投影であり、君の内にあるものは、君の外にあるものの投影だ。だからしばしば君は、君の外にある迷宮に足を踏み入れることによって、君自身の内にセットされた迷宮に足を踏み入れることになる。それは多くの場合とても危険なことだ」

これは小説後半でカフカが入り込む岩の中の世界（下 p.408）と同じ性質のものではないでしょうか。その意味では、カフカ、佐伯、田村浩一それぞれがそれぞれの迷宮をめぐる物語を生きているといってもよいかもしれません。そうしてカフカのめぐる迷宮を端的に言うトエディプス・コンプレックスである、というわけです。この迷宮を無意識の葛藤+願望と言いかえることもできるでしょう。

ナカタさん

カタカナで表記されるナカタさんはカフカの無意識過程を表しているということはすでにお話しいたしました。ナカタさんはジョニー・ウォーカーを殺害することで、カフカにとっての無意識的父殺しを代わりに行っているのです。

さて、中田君をナカタさんに変えたものは、小説によれば、家庭内の暴力ともう一つは、疎開先の女性担任教師による暴力です。この女性担任教師は、非常に強い性的欲求とその充足を夢の中でありながらリアルに体験し、それと関連して生理が生じます。それを中田少年に見られたことによって、強い暴力すなわち攻撃性が発動してしまつたわけです。本来は性的な欲求に対して抑制の強い人であつたようですから、この暴力の背景には、性的衝動の満足という欲求充足とそれにたいする強い罪悪感、そういった内面を見られたと感じたことへの狼狽と怒り、などが渾然としていたのではないのでしょうか。「気がついたとき私はその子を、中田君を、叩いていました。肩のあたりをつかんで、何度も何度も平手で頬を張つてました。何か叫んでいたかもしれません。私は混乱していました。明らかに自分を失っていました。」(上 p.209) というのも性的欲求など感じないでいるはずの自分が強い欲求を感じてしまったことで、壊れてしまうというような混乱状態が起きたのでしょう。この女性教師の性的欲動と暴力の有り様は、ナカタさんの欲動のなさとは対比的です。ナカタさんには、食欲と睡眠欲は描かれるが、性欲は全くないことにな

っていますし、食欲と睡眠欲も欲という感じからはほど遠いものです。カフカ少年も欲求に対しては自制的であり、性欲にしてもどこか機械的に処理している感じがあります。そういったありようとは対照的ですが、人間的であるのはむしろ女性教師の心の有り様の方だと思えます。

中田少年がこの女性教師に心を開き始めた時に、この事件が起きており、そのことでナカタさんはなにか大きな部分を欠落させてしまったのですが、これはカフカの母親としての佐伯さんが、やはり何らかの怒りをカフカに向けたが故にカフカを捨てたことと対比できるかもしれません。中田少年はその経験故に無意識的な存在となりますが、一方カフカは自らを回復する意識的な側を担っており、心理学的にはそれは両方が私たちの心の中の動きである、ということだと見てもよいでしょう。

ナカタさんが何かを欠落させているという点は、ナカタさんには通常人が感じるような願望がなく、また文字が読めず、恐怖や怒りや憎しみなどの人間の持つ自然な感情もほとんどない人物として描かれているところにあると思われませんが、このことはどのように考えられるでしょうか。先の挙げた精神分析学者の木部はこの点について、ピオンを参照してナカタさんの精神状態は、LHK結合の喪失であると指摘しています。LHK結合というのは、Love・Hate・Knowingの三つの結合のことで、これは人が人と情緒的に関わるために必要な機能だとされています。ナカタさんにはこういった機能の結合が見られないということですが、食欲、性欲、好き嫌い、知識を獲得すること、こういった機能はナカタさんからは欠落してい

るわけですが、おもしろいことにカフカが成長することと対応するように、ナカタさんも星野青年との旅を通して変化していきます。Loveの機能は星野青年を通して、Hateはジョニー・ウォーカーを殺すプロセスで、Knowingは図書館を通して、獲得していきます。そうして三つが整ったときナカタさんは再度、人としての機能を取り戻したのでしょうか、長いあいだ抜け殻、小説中では影が半分の存在として書かれています。そのように生きてきて年老いた人間にとっては、死をもたらすような衝撃にもなってしまったのでしょうか。

ナカタさんは空っぽであり、それ故いろいろなものの中を通ることができた。その意味では憑代、今風に言うならチャネラー、だったのでしょうか。神の降りる入れ物、憑代でした。しかしジョニー・ウォーカーを殺す体験は非常に情緒・感情を揺さぶることになり（LHK結合）、空っぽでいられなくなっていく。そのためネコとも話せなくなり。最後にナカタさんを通じて出てくる不気味なものは、ナカタさんが取り戻したいろいろな人間的感情（きれいなものも汚いものも含んだもの）、しかもそれはかなり生々しいものであり、まさに欲動そのものではないでしょうか。その意味ではユングの言う集合無意識という方が近いかもしれません。

本来無意識はそのまま出てきてはいけないものです。エディプスの葛藤を通して人が獲得する心的能力は、無意識的願望をそのまま意識に登らせないという能力です。生々しい欲動がそのまま意識に登ってし

まったら、意識を正常には保てないほど危険だからです。ナカタさんのある種の純粹さはこのような抑圧すべき欲動（邪悪なものでもあり、しかし人間的でもあるもの）がないためです。しかしそのような存在は人ではないともいえるわけですし、人でないが故に無垢で神聖を帯びて生きてこられたナカタさんは、人になったときに、死を迎えたのではないのでしょうか。白い目も鼻もない不気味なものは、ナカタさんを通って出てきた（下 p.495）のですが、それは本来私たち一人ひとり心の中に抱えながらそれと向き合い、ときにもてあまし、ときにそれがあるために喜びを感じたりすることもできる、しかしそのまま出てきてはいけないもののように思えます。カフカ少年が、森を抜け岩の中の世界という迷宮で、受け入れようとしているものでもあるのでしょうか。

僕は自分自身の内側を旅しているのだ。（下 p.372）

母親に愛されなかったのは、僕自身に深い問題があったからではないのか。僕は生まれつき汚れのようなものを身につけた人間じゃないのか？僕は人々に目をそむけられるために生まれてきた人間ではないのだろうか？（下 p.373）

君がやらなくちゃならないのはそんな彼女の心を理解し、受け入れることなんだ。彼女がそのときに感じていた圧倒的な恐怖と怒りを理解し、自分のこととして受け入れるんだ。……言いかえれば、君は彼女

をゆるさなくちゃいけない。…それが君にとっての唯一の救いになる。(下 p.378)

そして最終的に、

もし僕にそうする資格があるのなら、僕はあなたをゆるします。(下 p.471)

とカフカ少年は、怒りや恐怖に飲み込まれることなく、人間的であるために必要な、しかしやっかいな
もろもろを受け入れることができたのではないのでしょうか。

わくろ

さくらはカフカの中で、姉ではないか、という空想の対象となる人物です。そして父親の予言と一部重なり、さくらさんと交わる『夢』(下 p.310)を見ます。しかしこれは佐伯さんとカフカ少年が交わったことが現実であるのに対して、あくまで『エツチな夢』(下 p.525)としてであり、つまり許容される空想であり、現実的には、悪いことはなにもおこっていない、のです。すなわちさくらさんとの交わりはエディプス願望の実現ではなく空想のなかで完結していることがとても重要なのです。さくらはたしかに風変わりなところを持った人物ですが、『健全』です。カフカの見た夢の中でも、そして現実でも、性を抑圧するでもなく、過剰に巻き込まれるわけでもなく関わっています。佐伯さんとのカフカとの関係は、結

局のところ佐伯さんの死によって現実には分かたれてしまうわけですが、さくらさんとの関係は健全に保たれているという事になります。もしさくらさんが誘惑的であったとしたら、カフカは再度傷つくことになったと思われます。それこそナカタさんのようにある意味で中身を失うことになったかもしれません。

十五才の佐伯さん

これは小説内では幽霊として描かれています。精神病理的観点から見ると、人格解離した佐伯さんではないかと思われます。本来エディプス空想とは幼児が母親に抱く恋愛感情を元にしたものであり、よって幼児であるがゆえにその性欲は現実には実行不可能なものです。その状態でエディプス葛藤を乗り越えることで、思春期以降に恋愛対象を母親以外に求めることができるわけです。しかしまずカフカ自身が精神的発達に大きな欠落、すなわち人と関わることへの極端な回避傾向を持っており、十五才という年齢にして初めてエディプス的な恋愛感情（と健全な思春期的な恋愛感情の混じったもの）を佐伯さんに感じたのでしょうか。カフカはここではじめて、愛情とそして佐伯さんのパートナーであった、つまり父親であった、甲村氏に敵意や嫉妬を感じる（下 p.20）ことができています。ただやっかいなことに佐伯さんは自身の病理によって十五才の人格に解離してしまうことがあり、十五才のカフカ少年と十五才の少女の佐伯さんとの間には、本来は近親相姦タブーであるはずの関係の中に、何割か健全な恋愛感情が成立してしまっ

たともいえます。それは「眠っている」(下 p.112)とはいえ、空想で終わるべきエディプスが現実に成立してしまつたということであり、近親姦タブーを犯したことになるのでしまつたわけです。このような混同や取り違えはどういった意味を持つでしょうか。漢字の言葉遊び(anagram)ではありますが、甲村の甲の字は田と中に分解できる。甲村＝田村＋中田となります。佐伯さんが抜け殻となつた自身の半生の記録をナカタさんに託すのは、ナカタさんの幾分かを甲村氏と混同しているからでしょう。

カフカとの性交については、佐伯さんは別人格状態であつた、つまりカフカを息子ではなく、十五才の甲村氏と見ており、自身も十五才の佐伯さんになつていたので、非常に危ういながらも、カフカ少年はエディプスが感じたほどの罪悪感にはさいなまれずに済んだのかもしれない。エディプス自身は自分の身に起きていることを知ったときに目をつぶして、見ないことを選んでいますが、カフカは森から戻る道を選べているのです。

星野青年(ホシノくん)

星野青年はおじいさんにかわいがられた体験を持っています。その点でカフカ少年よりは愛着や愛情関係に対して健全な感性をはぐくんできるといえます。そういう意味では、星野青年の内面はある程度育つてはいたのでしょう。しかしやはり欠落した生育環境の中で足りないものもあつたのでしょう。いわば種

が土には埋まっているのですが、水がなかった・・・そのため発芽できないような状態なのでしょう。その水の役割を果たしたのが星野青年からみたナカタさんです。ナカタさんは一種のチャンネルもしくは通り道であり、触媒であるということは先にも述べました。星野青年はおじいさんという愛着対象を持つっており、さくらさん同様健康です。ただ祖父を失ったことに対しての喪の作業は不十分でした。感謝を伝えることもできなかつたのです。そしてその思いから祖父の代わりにナカタさんを助けることで祖父への恩返しをしていくことになりました。しかし祖父とナカタさんは別の人であることをきちんと自覚しています。つまり現実検討力は維持されており、錯覚や過剰な投影をしているわけではないのです。これが混同や取り違えをしないでいられる理由です。ホシノくんはナカタさんの死を看取り、その責務を引き受けて果たすことで適切に喪の作業を行ったといえるでしょう。そのプロセスの中で、興味深いことに本質的な意味で知的なもしくは教養を身につけるといえる能力を獲得していきます。これはカフカが行っていたようなスポンジのように知識を吸収するということとは対極的であるといえるでしょう。これはエディプスを乗り越えた後、性的エネルギーは一時的に身を潜めることとなり、その抑圧に自身の心のエネルギーを割かなくてすむ分、社会的なことや知的な事へと興味関心を向ける、気持ちのエネルギーをそういった作業に振り分けることができるということをよく表しているといえるでしょう。

大島さん

大島さんは、身体的な「しくみ」は女性で精神的には男性で、肉体は両性具有であると描かれています。心と体はつながりあっていますのでそう考えると大島さんには性的アイデンティティを支える身体的基盤がない、ということになります。それは「とっかかり」がないということであり、そういう大島さんにとっては、性的なアイデンティティの獲得、性役割の獲得は非常に困難であったと推測されます。このような状態にありながら、大島さんが一定の精神バランスを保っていられるのは、想像力を駆使しているからでしょう。だからこそ「想像力を欠いた人々」に対してうんざりしているのでしょう。両性具有であることをもって、男女両面の、すなわち両親の役割を果たしていると断じるのは少々乱暴であると思いますが、カフカに対して現実はどう関わっていけばよいかを教えているのは大島さんです。カフカ少年に対しては、父と母の両方の養育的もしくは教育的機能を発揮しています。想像能力は大島さんの精神的バランスを支えており、必要な能力なのですが、現実から切り離された想像能力の暴走は妄想ともなります。アイヒマンのことを読む部分で、「すべては想像力の問題なのだ。僕らの責任は想像力の中から始まる。」(上 p.277)とありますが、まさに実際に行動に移す前に考えることができることは重要な精神機能です。その点でナカタさんを見てみると、ナカタさんには想像能力はないようです。それは「彼には架空の痛みというもの」を想像することができない。」(上 p.256)と「いつ」ことであり、通常そのようであれば危険を回避したりす

することもできないでしょう。大島さんの存在は、想像能力の価値をよく表していると思われます。

カフカにおけるエディプス葛藤の処理

カフカ少年は、一般的な形でエディプス葛藤を乗り越えることはできていませんでした。ではカフカ少年は結局のところどのように葛藤を乗り越えたといえるでしょうか。

兵隊たちと入り口の石をあけた世界に向かう直前、森の中を歩くカフカは「どうして彼女は僕を愛してくれなかったのだろう。僕には母に愛されるだけの資格がなかったのだろうか？」という自身の存在自体に対する疑問を投げかけます。助言者であるカラスは、佐伯さんの気持ちについて「よおく考えるんだな。そいつはね、君が自分の頭でしっかりと考えなくちゃしょうがないことなんだ。頭つてのはそのためにあるんだからさ」と助言し、カフカはそれに従い、「愛することと傷つけること」について考えようとしていきます（下 p.373～381）。カフカが十五才思春期というただでさえこころのバランスが危うくなる段階になって初めてエディプスの課題に直面したにもかかわらず、それを乗り越えていったのは、その理由は物語の中からはしかとはわかりませんが、この自分を振り返る力をもっていたことにあるといえるでしょう。助言者がいたと描かれています。心のこのような助言者はカフカの考えるという心的能力の現れと言えるでしょう。どうやら謎のように思います。エディプスは、盲目になることで、見ないことにつ

まり「見る目」を閉ざしたわけですが、カフカは現実を見ることを選んでいます。そうして、カラスが「うだな、君がやらなくちゃならない」と言った、「たぶん君の中にある恐怖と怒りを乗り越えていくこと」ができ、「そこに明るい光を入れ、君の心の冷えた部分を溶かしていく」ことで、筋肉のような皮膚でない本来の皮膚を取り戻したのではないのでしょうか。(下 p.319)。

入り口の石の世界には、十五才の佐伯さんがいました。この佐伯さんはまるで母親のようにカフカの世話をしており、「必要があれば、私はそこにいる」(下 p.428) 存在です。現実の母親は姿を隠してしまっただけですから、対照的です。この世界がカフカの無意識世界(「この時間が重要ではない世界下 p.451」)だとするならば、ここでカフカは初めて、子どもの頃に受けるはずであった母親からの庇護と世話を受ける体験を得たことになるのでしょうか。そのなかで、カフカは自身の怒りから離れ、「お母さんと君は言う、僕はあなたをゆるしません。そして君の心の中で、凍っていたなにかが音をたてる。」(下 p.451) 怒りにまかせて大事な対象を破壊するのではなく、気持ち修復することができます。失うくらいならいつそ先に壊したいというような全か無かという極端なものの方ではなく、人の抱える矛盾・・・愛したいのに傷つける、好きなのに嫌い、を受け止めて抱えていられるようになっていきます。この成長によって、現実世界に戻ることが出来たのでしょうか。下 p.456に始まるカラスとジョニー・ウォーカーの対決は、健全な母子関係に支えられたエディプス対決を表していると木部は指摘しています。健全なエディ

プスでも内的にはかなりはげしいものであることが感じられると思います。エディプス対決ができてきていることは、かつてカフカは対決を避けて、「家出」をしたことと比べると大きな成長です。もちろんかつてカフカが避けようとしたのは父親を殺してしまうことだったわけですが、本来父殺しは実際に行うものではなく、心理的につまり想像の中で行うものなのです。しかしある程度のこころの発達があれば、想像の中だけでは収まらず現実には殺してしまうことが起きてしまいます。その意味で、まだ十分な成長を得られていなかったときのカフカは、本当に父親を殺してしまう可能性があったのでしようが、成長したカフカは十分な想像力のもとで、現実的な破壊を引き起こさずに対処できるようになったのでしよう。

まとめ

以上をまとめてみます。この小説は、カフカという十五才の少年が、十分な母子関係に支えられる体験を得られずに、エディプスの葛藤から逃避するところから始まりました。それは父の呪いを恐れた故の逃避であると同時に、母親を求める旅でもありました。そのなかで、「母」と近親姦的に結ばれ、非常に危機的な精神状態になりかかりはしたのですが、姉と交わるというもう一つの呪いについては空想として現れせずに回避することができました。またナカタさんによって父殺しが行われますが、カフカ少年にとつては自ら手を下してはいない、という意味ですが、あくまで空想内で象徴的に父殺しを達成すること

ができました。そうして、最終的に母親を許し母親から許されるという体験を通して、自分が存在していることの価値や意味を認めることができ、それらを通して成長することができた、という物語であるといえるのではないでしょうか。

『海辺のカフカ』の主筋の下敷きに、ギリシア悲劇の古典である『オイディプス王』とそれに着想を得た「エディプス・コンプレックス」が存在しているという構図は、この作品を「世界文学」として位置づけることのできる最も大きな論拠であり、作品としての根本的な戦略となっている。

一方、副筋はどうだろうか？ とくに作品中、多くの読者に好感をもって受け入れられるはずの星野青年について、二人目の発言者である小林宣之（フランス文学）が論じた。以下は、当日の発表で利用した原稿に基づく文章である。また小林が作成し、当日講座にて配布された資料一覧も続けて収録する。
